

防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第83号(2014. 2. 1)
事務局川西地区自主防災会

讃岐の風土、歴史に育まれた災害文化を発掘しませんか！

香川大学工学部・危機管理研究センター
長谷川 修一

日本は、いま大自然の脅威とグローバリズムの脅威とにさらされています。大自然の脅威は、プレート境界の変動帯の日本列島に住む日本人の宿命です。太平洋沿岸地帯は、繰り返し海溝型巨大地震の地震と津波、時には大規模火山噴火の洗礼を受けてきました。

またグローバリズムは、相手の国の事情を顧みず、一方的に自由貿易や構造改革や規制緩和を求めます。まるで今だけ、自分だけ、金だけが大事な、力と資本が支配する植民地主義のようです。グローバリズムの洗礼を受けた世界各地で地場産業そして生活そのものが破壊され、地域の文化と伝統が廃れてきています。その結果、社会が災害に対して脆弱になります。

グローバリズムによって勝ち組と負け組みに分断された日本を南海トラフ巨大地震、首都直下地震、大規模火山噴火(富士山等)などの巨大自然災害が待ち構えています。同じような自然災害として、1703年元禄地震、1707年宝永地震、1707年富士山の宝永噴火がありますが、その当時は鎖国のため大きな動乱はなく、幕府と諸藩と民が助け合って、難局のりきって、新田開発の高度成長から地場と産業と文化を活かした安定成長へとうまく転換したと、歴史家の歴史家の磯田道史先生は評価しています。

しかし、江戸時代と現在では土地利用が全く異なっています。しかし今や、1703年元禄地震と1707年宝永地震の津波が襲った新田と干潟は日本の産業の中核である太平洋ベルト地帯に変貌し、その地上と海底には大量の有害物質や危険物質が蓄積されています。この有毒物質が、ひとたび黒い津波となって沿岸部の低地を襲うと、津波浸水域が土壤汚染地区になる恐れがあります。そうなったら、今だけ、自分だけ、金だけが大事なグローバル資本はどうするでしょうか？

昨年末に首都直下型地震の被害想定が公表されましたが、想定された被害の小ささに驚きました。1855年の安政江戸型地震の死者は大きく見積もって約1万人、1923年関東大震災の死者は約10万人ですので、3000万人を越える首都圏の死者が最大で2.3万人は小さすぎるのではないのでしょうか(私は100万人を覚悟していました)。

また、首都直下地震が発生すると、地方から物心両面の仕送りが止まり、東京では万事休すとなる恐れがあります。鴨長明も平安末期の災害後における京の困窮を方丈記に記しています。



「京のならひ、何わざにつけても、源は、田舎をこそ頼めるに、たとえ上るものなければ、さのみやは操もつくりあえん。(京都の経済というものは、いつも、何にもよらず、根源は、地方に依存しているのに、まったく送り込まれるものがないものだから、こうなると、とても平常のような体裁をつくらてなんかいられやしない。)(築瀬一雄訳注、角川ソフィア文庫)」

東京一極へ集中する人とマネーの流れを少しでもくい止めて、田舎に向けるには、地方にマネーとは別の価値を見出し、地産地消の助け合いの経済を復活させる必要があります。これは、巨大災害時のレジリエンス(回復力)にもつながります。ソ連崩壊の際に旧ソ連の住民が食いつなぐことができたのは、食糧の備蓄と家庭菜園(ダーチャ)だといいます。この教訓を考えると、これからの農業は国際競争のために大規模化でなく、戦争や国際戦略による油断や自然災害などに対する備えになる兼業化、小規模化、地産地消で、休耕田を活用した半農半X(仕事)が災害列島にふさわしいのではないのでしょうか。そして、1ヶ月の備蓄と家庭菜園があれば、巨大災害になっても、油断が引き起こされてあわてずに、分かち合いと助け合いで対処することができます。

災害列島で暮らすには、競争ではなく、助け合い、分かち合いの災害文化が基本です。磯田先生によれば、この災害文化はどうも江戸時代に出来上がったようです。また、東日本大震災では、縄文時代の遺跡が津波による被害を受けなかったことも注目されました。津波で大きな被害を受けた東松島市里浜貝塚では、縄文人が何千年も標高約 50m の高台に暮らしていました。そういえば、観音寺市沖の伊吹島では、鮮度が命のいりこ工場は海際ですが、住宅は高台にあります。家と職場を一度に失わない知恵だと誇ることができます。

祭りの盛んな地域は、地域のつながりが強く、災害に強いと言われています。祭りを運営すること自体が、災害時の訓練になります。また、災害の伝承のための始まった祭りもあります。丸亀市土器町の田潮神社には、神社の由来を記録した石碑があります。

「南北朝時代の貞治元(1362)年、南朝方の細川清氏と北朝方の細川頼之が従兄弟の間柄でありながら争うことに。夜襲を受けた頼之は出陣の際に同八幡宮に勝利を祈願、すると海の潮が満ちて田野を没し、敵の追撃を阻んだ。これをきっかけに田潮神社と名付けられ、故事にあやかり水浴び神輿が始まったという。」

今後、調査によって確認する必要がありますが、「海の潮が満ちて田野を没し、敵の追撃を阻んだ」のは正平地震(1361.6.24, M8.5?)による津波の可能性があります。もしそうなら、香川県が昨年公表した南海トラフ最大級の津波浸水予測図は、過去にあった最大級の津波の浸水域を再現したことになります。

田潮神社以外にも、香川県にはいろいろな災害の伝承が残されていると思います。讃岐の風土、歴史に育まれた災害文化を発掘し、地域防災に活用しませんか！

実は、グローバリズムが嫌がるのは、国や地域固有の文化なのです。地域の文化と伝統を地域で協力して守ることは、防災力の向上だけでなく、グローバリズムへの抵抗勢力にもなるのです。

【お知らせ】

第3回 市民防災セミナー

「南海トラフの巨大地震に備える」

参加無料
※お申し込みは要します

日時 2014年2月9日(月)
8:30～16:00(受付13:00～)

会場 香川県教育会館ミュージックホール
香川県高松市万福6-10

TEL:0877-8511334
TEL:0877-330111

プログラム

 13:00～ 13:35～14:35 講演1 「南海トラフの巨大地震に備える」 講演者: 長谷川 幸一 香川県立中央図書館長	 14:35～14:45 14:45～15:45 講演2 「地域災害からの復旧に向けて ～公助・共助・自治(民間等)の果たす役割～」 講演者: 橋本 山久 香川県立中央図書館副館長
--	--

主催 日本防災学会岡山支部、香川県防災協会、香川大学危機管理研究センター
共催 日本建築学会岡山支部
後援 香川大、高松市、高松市消防、NHK高松放送局、RBCテレビ放送、KSRラジオ放送局

お問い合わせ 香川大学危機管理研究センター
〒760-8502 高松市東町4-22-13-202
TEL 0877-8511334
FAX 0877-330111
E-MAIL kpmr@u-nm.ac.jp

第6回 香川大学 危機管理シンポジウム

大規模災害に強い 地域づくりに向けて

日時 2014年2月21日(金)
11:30～17:00(開場11:00)

第1部 地域報告会・活動報告(11:30～12:30)

危機管理研究センター平成25年度事業報告
白木 暁(センター長(工学部教授))
「地域組織マネジメント(DCM)概論」
-香川地域連絡時空協会の活動状況
-防災・危機管理教育研究センターの形成状況
「防災危機管理教育研修システムの開発状況」
-九州・中国・四国防災研究センター連携協働活動など
-香川大学事業総覧シンポジウム
-香川地域連絡協議会(部局)の取組について
「四国防災・危機管理研修プログラム共同開発による専門家の養成」などについて報告
防災士養成講座(社会人向け)及び防災士養成地産地消プログラムの紹介
および危機管理研修協働計画について
長谷川 幸一(工学部教授)
メンタルヘルスプロジェクト活動紹介
平岡 龍広(医学部教授)

学校・市民防災教育への取組活動紹介
-香川県教育委員会の学校防災アドバイザー派遣事業報告
-防災教育推進委員会活動紹介
-山生山地区コミュニティ協議会ための防災マップを使用した災害訓練
野々村 敦子(工学部准教授)
林 安寿(医員研究員)

第2部 基調講演(14:00～15:00)
「南三陸町支援に学ぶ災害に強いまちづくり」
田上 豊貴氏(高松市中央東福祉保健所長)
「防災危機の総力戦の体制づくり」の重要性とその具体的な取組についてご講演をさせていただきます。特に災害時は、地域性による互助・互助が最も大切であり、それと区画や介護福祉といった専門職がうまく協働すること、さらにそうした活動をいかに現場から支える行政の役割について、田上先生が南三陸町の支援でご経験された内容につきましてご講演させていただきます。

休憩(15:00～15:10)

第3部 パネルディスカッション(15:10～16:50)
「地域防災力向上に向けた行政・民間の取組について
～私たちが備えなければならないことは何か～」

コーディネーター	白木 暁(工学部教授)
モデレーター	岩野 真晴(新センター長)
パネリスト	田上 豊貴氏(高松市中央東福祉保健所長)
	石井 一生氏(国土交通省高松地方整備局企画課長)
	西澤 洋一氏(高松市総務課次長)
	菊地 正剛氏(丸亀市川高地区向主防災協会会長)
	野田 浩子氏(香川県南地区防災協会会長)
	野田 康弘(香川大学医学部教授)

近い将来発生が予想される南海トラフ巨大地震への備えとして、国土交通省四国地方整備局、高松市から、災害への備えの現状についてご紹介いただくとともに、自主防災組織および女性の立場から民間における災害への備えの状況、さらに民間現場の立場から備えの状況についてお話をさせていただきます。
次に、地域防災力向上に向けた観点からそれぞれの立場で、今後、私たちは何をどのようにしていかなくてはならないかについて意見交換を行います。最後に、アドバイザーの田上先生のコメントなどを踏まえたディスカッションのとりまとめを行います。

閉会挨拶(16:50～16:55)
白木 暁(センター長(工学部教授))

場所 サポートホール高松
5F 第2小ホール

平成25年度自主防災組織リーダー研修を振り返って

香川県危機管理総局危機管理課

去る1月26日（日）に、香川県消防学校において「平成25年度自主防災組織リーダー研修」を開催しました。今年度は、日曜日ということもあり、県内各地の自主防災組織のリーダー等約70名が受講し、香川大学危機管理研究センターの磯打千雅子特命准教授による基調講演、講演活動などで全国を飛び回っている「ぼうぼうネット」（山口県）の山崎隆弘事務局長、さらには岩崎会長をはじめとするかがわ自主ぼうの皆様による状況付与型図上訓練そして意見交換会という盛り沢山のメニューとなりました。



まず、「地域防災リーダーに必要な資質と素養」との演題で磯打先生の講演が行われ、災害時に組織や地域が生き残るために必要な事項、そして地域は災害時にどのような組織で立ち向かうべきか、地域防災リーダーに求められる資質や素養はどのようなものかなどについて、興味深いお話をいただきました。

次に、「災・その時に動ける人づくり」～いやいやしぶしぶの防災活動を楽しむ



方法～との演題で山崎事務局長の講演が行われ、昨年夏に大きな被害を受けた「山口島根豪雨災害」における島根県津和野町の事例さらには講師の地元である山口県防府市における教訓などをふんだんに使った講義、さらにはプチ(?)ワークショップとして、参加者が防災活動を楽しむために必要な事項を自由に挙げていただくなど、1時間という予定の時間を濃密に過ごすこととなりました。

午後は、かがわ自主ぼう連絡協議会による状況付与型訓練が行われ、岩崎会長をコーディネーターに、また有志の方々をインストラクターにお迎えして、班別討議そして発表を行いました。短い時間で参加者の皆様も見解をまとめ、発表されていましたが、岩崎会長からは、「災害時にはいろいろなことが発生する。もうすこしいろいろなことに思いを巡らすことが必要」との苦言をいただく一幕もありました。



最後になりましたが、今回の研修の講師の先生方をはじめ、サポートいただいた方々、そして研修にご参加の皆様にご挨拶申し上げます。ぜひ、今回の成果を地域に持ち帰り活かしていただければと思います。

かがわ自主ぼうの事務局を担当している川西地区自主防災会の最近の活動を紹介します。

祝
三
冠

川西地区自主防災会が

「第18回 防災まちづくり大賞」(主催:消防庁)

選定委員特別賞を受賞!!

平成18年度(第11回)に消防科学総合センター理事長賞、

平成21年度(第14回)に総務大臣賞に続く三度目の受賞となります。

大型発電機の格納庫、完成!

平成25年7月に大型発電機購入、その後、ブルーシートにかけてコミュニティセンターの駐車場に置かれたままになっておりましたが、昨年末に立派な格納庫が完成しました。

格納庫の基本条件は、約850kgの発電機を天井から吊るしてトラックの荷台に乗せるだけの耐荷重能力を建築本体に持たせること。

この結果、骨組みは鉄骨として、荷重計算を行ないながら、設計から施工までを、コミュニティセンター一職員の高橋氏(事務責任者)によって行なわれました。

鉄骨の裁断から溶接作業までコツコツと自宅の倉庫で実施して、12月23日に棟上式を行いました。過去に土器川が氾濫して40cmまで浸ったことから発電機は約60cmの高さで保管しています。



編集後記

今月の防災減災の輪は、香川大学工学部 長谷川教授より原稿をお寄せいただきました。誠にありがとうございました。